

I 北村賞

我が国における公園緑地行政のパイオニアとして、長年、公園緑地に関する理論の研究と行政実務の指導に尽くされ、また日本公園緑地協会の実質的創設者として協会の育成と発展に大きく貢献された北村徳太郎先生の業績を称えるため、日本公園緑地協会の中に「北村賞」が設けられています。

この表彰制度は、北村先生が昭和39年5月8日にご逝去されたあと、その業績を記念する事業の一環として、昭和43年3月社団法人日本公園緑地協会において「北村賞及び同基金に関する規程」及び「北村賞実施要領」を定め、公園緑地等の行政または調査、研究、計画、設計、管理・運営の理論等に全国的視点から著しい功績のあった方を表彰する制度です。

なお、この表彰は、昭和45年度から隔年ごとに実施してきましたが、昭和63年度からは毎年表彰を行っております。

第43回北村賞受賞者（敬称略・五十音順）

① いまにし よしとも
今西 良共 （63歳）

元 名古屋市緑政土木局緑地部長

現 岐阜県立国際園芸アカデミー学長

受賞理由

氏は、昭和55年に名古屋市へ入庁以来、公園緑地の計画から整備、管理、運営に至るまで幅広く活躍された。特に、公園を市民の重要な資産としてとらえた公園経営の取り組みを積極的に推進した。平成29年にオープンした名城公園の民設民営による複合営業施設「トナリノ」は、民間のノウハウを活かした利便性やデザイン、催事等により、公園の新たな魅力や賑わいを創出した。また、平成30年にオープンした鶴舞公園の多目的グラウンド「テラスポ鶴舞」は、公益財団法人が施設整備から管理運営まで全てを行い、質の高い施設運営を実現している。このような公園への民間活力導入の業績は、名古屋市の公園経営に寄与しただけでなく、全国の公園への民間活力導入の先駆けであり、その功績は多大である。さらに、名古屋市退職後も岐阜県立国際園芸アカデミー学長や（一社）公園管理運営士会副会長を努めるなど、現在も公園緑地の発展に貢献している。

② ^{かわしま}川島 ^{たもつ}保 (69歳)

現 株式会社ランズ計画研究所代表取締役

受賞理由

氏は、ランドスケープコンサルタントとして、その場所が辿ってきた歴史を読み解き、将来に渡って人と共存できる未来の景観を想像することをモットーに、公園緑地の計画・設計・監理に邁進している。

とりわけ、氏が主任技術者としてランドスケープの設計協力に携わった、東京駅八重洲口駅前広場は2017年土木学会デザイン賞優秀賞を受賞し、神奈川県立大磯城山公園旧吉田茂邸庭園実施設計においては第35回都市公園コンクール設計部門日本公園緑地協会会長賞を受賞するなど、周囲との調和を図った空間の創出は高く評価されている。

また、氏はランドスケープコンサルタント協会や公園管理運営士会の役員として、また、「社会・環境貢献緑地評価システム (SEGES)」の審査員として、独自の厳しい視点にて会の運営に忌憚のない意見を寄せる等、社会活動にも積極的に参画し、緑関係団体の活性に貢献している。

③ ^{たなか}田中 ^{みつる}充 (67歳)

元 神戸市建設局公園砂防部長

現 公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会専務理事

受賞理由

氏は、昭和53年に神戸市に奉職して以来、市の観光拠点である布引ハーブ園の建設や、国営明石海峡公園事業に際しては、地域の窓口として事業調整に深く関わるなど、神戸を代表する公園づくりに尽力した。また、神戸市緑の基本計画策定を主導し、公園整備や都市緑化、六甲山の緑地保全など、今日の神戸市の緑地行政の礎を築いた。

特に、阪神淡路大震災時には、震災復興の過程において、土地区画整理事業や再開発事業と連携した防災公園づくりや水と緑のネットワーク形成に大きく貢献した。その中でも、2002年サッカーワールドカップの会場ともなった御崎公園は、市を代表する防災拠点として、先進的な防災施設を備えた屋根付き球技場の建設に、中心的な役割を果たした。

さらに、こうした震災の経験や幅広い知見を活かして、「緑の基本計画ハンドブック」ほか、全国的に利用されるマニュアル作成の委員にも指名されるなど、幅広い業績を残している。

④ ^{はやし} ^{てるゆき}
林 輝幸 (69歳)

元 西武造園株式会社代表取締役社長

現 横浜市グリーン事業協同組合理事(経營業務管理責任者)

受賞理由

氏は、公園緑地全般にわたる幅広い知見と豊富な経験、既成概念にとらわれない創意工夫やチャレンジ精神、不断の努力により、公民連携による公園管理や運営に大きく貢献してきた。特に、指定管理者制度にいち早く参画し、横浜市潮田公園、入船公園等での丁寧な取組は好評を得て、この実績をもとに、今日までに3か所の国営公園をはじめ首都圏から沖縄まで全国476公園の指定管理者として最前線で指揮にあたってきた。

また、全国初の立体都市公園制度で、みなとみらい線「元町・中華街駅」上部に拡張整備された「アメリカ山公園」の管理運営事業者として、他例のない画期的な管理運営を展開し、多くの観光客誘致や地域振興を実現した。

こうした氏が先駆者として実践した管理運営手法は、いずれも、制度趣旨にそって公園機能を最大限に生かすもので、全国に波及し、公園の賑わい創出、サービス向上等に大きく寄与している。

⑤ ^{みやぎ} ^{しゅんさく}
宮城 俊作 (63歳)

現 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授

受賞理由

氏は、米国で大学院修了、実務経験を積んだ後、千葉大学、奈良女子大学、東京大学で公園緑地を担う人材の教育に関わってきた。教・実務を行う「プロフェッサ・ランドスケープ・アーキテクト」の先駆で今も最前線に立つ。

氏は、先進のランドスケープ設計理論に基づき多くの作品を全国に残している。対象は公園緑地にとどまらず美術館・ホテルの迎賓空間、住宅地再整備等、公共空間全般に及ぶが、それらの経験を公園緑地等の質の向上に反映させている。特に東日本大震災では日本造園学会の復興支援調査の陣頭に立ち、宮城県七ヶ浜町の復興に一早く携わり、公園緑地分野の復興支援のあり方を書籍刊行を通じ示した。

専門誌での作品発表、多くの書籍刊行による計画設計思想の解説等、教育啓発は所属大学の枠を越え、さらに一般誌等を通じランドスケープを広く社会に発信した。全国で公園緑地に関わり活動する多くの人々が氏の薫陶を受けたと言っても過言ではない。

(年齢、役職は令和3年3月31日現在)